

教科名

数学

	学力調査・体力調査・定期考査等の分析	指導方法の課題	授業革新に向けての具体的な手立て
7 学 年	<p>・TOFASの結果から、平均正答率（かっこ内の数字は受験者全体平均正答率との差）は、かけ算・わり算87.7%(+2.7%)、分数の加減70.5%(+8.2%)、小数の加減84.4%(+5.7%)、計算のきまり86.0%(+4.6%)、 小数の乗除76.1%(+5.0%)、分数の乗除68.1%(+4.3%)であり、平均値からの読み取りでは、すべての分野で概ね理解できているのが分かる。 ・定期考査では「知識・技能」の平均正答率64.2%、「思考・判断・表現」の平均正答率45.7%となっている。 TOFASでは、基礎的・基本的な問題かつ計算問題のみの出題となっていた。よく読み、考える力を身に付けることが課題である。</p>	<p>・計算の反復でやや複雑な計算問題であっても粘り強く解いていける力を身に付けさせる。 ・単元と単元の「つながり」や「違い」を理解させる。 ・答えのみを求めるだけではなく、その過程を重視し、説明する力を身に付け、数学的帰納法で証明できるようにする必要がある。 ・課題解決型学習で、レポートに自分の考えを簡潔にまとめる力を身に付けさせる。</p>	<p>・家庭学習と授業を連動させる。 ・生徒が自分自身で解く時間を十分に取る。 ・単元の導入や課題学習を通して、数学の有用性を感じさせ、自分でそれを表現できるようにする。</p>
8 学 年	<p>・TOFASの結果から、平均正答率（かっこ内の数字は受験者全体平均正答率との差）は、分数の加減86.3%(+1.8%)、分数の乗除90.3%(+5.3%)、正負の数86.7%(+4.1%)、文字式88.3%(+6.7%)、 方程式78.6%(+6.3%)であり、すべての分野でよく理解しているのが分かる。しかし、定期考査における「思考・判断・表現」の正答率は、中間考査で38%、期末考査で37%と低い。特に立体を見る力や思考力が低い。</p>	<p>・系統的な学習が課題である。 ・答えのみを求めるだけではなく、その過程を重視し、説明する力を身に付け、数学的帰納法で証明できるようにする必要がある。 ・課題解決型学習を行っていく必要がある。</p>	<p>・生徒の習熟の程度に応じた学習を定着させる。ドリルパークを有効活用する。 ・立体を見る力について定期的に学習する機会を作り、多面的な立体の見方を養う。 ・単元の導入や課題学習を通して、数学の有用性を図る。</p>
9 学 年	<p>・令和5年度全国学力・学習状況調査の結果から、平均正答率（かっこ内の数字は受全国平均正答率との差）は、A 数と式61.2%(−1.8%)、B 図形36.8%(+3.6%)、C 関数47.1%(−4.1%)、D データの活用41.9%(−6.6%)であり、図形の分野でよく理解しているのが分かる。しかし、他の分野での結果は低い。評価の観点における「知識・技能」の正答率は53.0%と高いが、「思考・判断・表現」の正答率は40.0%と低い。</p>	<p>・単に答えを求めるだけの学習ではなく、意味も重視して指導する。その際、学習内容を視覚的に理解できるように、ICT機器を活用する。 ・関数の基本的な知識を定着させるために、範囲を狭く定めた演習などを行い、フィードバックできるようにする。また、単調な出題の仕方にならないようにして、関数の本質的な知識・技能を身に付けさせる。</p>	<p>・単元の終わりには必ず単元テストを行い、結果をフィードバックさせる。 ・新しい単元に入るときはデジタル教科書を活用し、既習事項の復習を行う。 ・苦手な生徒が板書したことを書くことに一生懸命になり、自力で解くことをおろそかにしないようにするため、教材を工夫する。</p>